

令和8年度 公立小松大学入学者選抜試験
一般選抜（中期日程）試験問題

小論文

【国際文化交流学部】

国際文化交流学科

（注意事項）

- 1 問題用紙は指示があるまで開かないでください。
- 2 問題用紙は本文4ページです。答案用紙は2枚です。
- 3 答案用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
- 4 答えはすべて答案用紙の指定のところに、横書きで記入してください。
- 5 アルファベットや数字は、1マスに1字で記入してください。
- 6 字数制限のある解答については、句読点を1字と数えてください。
- 7 試験終了後、問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

I 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

真理ちゃんと私は中学校で出会った。小説や映画の話で気が合って、どちらも小説や映画にでてくる外国に憧れ、いつか一緒に世界じゅうを旅しようねと約束し合った。

二十歳になるとすぐに、互いにアルバイトをしてお金をつくり、約束通りに幾つかの旅をした。勿論“世界じゅう”というわけにはいかなかったけれども。

パリはどちらにとっても憧れの地の一つだったが、二人で初めてそこに行ったとき、旅はかなり悲惨だった。いまと違って、街なかで英語を話す人はすくなかったし、その英語すら十分には話せない東洋人の娘二人は、どこに行っても冷淡にあしらわれた。いま考えればわかるのだが、私たちはあきらかに実力不足だった。知識も語学力も自信も（ついでにお金も）ないばかりか、理不尽な対応をされたときに、きちんと抗議

する術も意識もなかった。パリは大人の街で、それらを持たない——従って一人前の大人とは認められない——人間にはつめたい。

カフェに入ってもギャルソンが席に案内してくれなかったり、六軒のホテルに断られたり（おかげで“満室”^{コンプレ}という言葉は覚えた）するたびに、私たちは憤慨しつつもじわじわと疲弊し、憂鬱になった。地下鉄一つ乗るのにさえ、毎回とても労力が要った。何しろ、当時は窓口の係員と押し問答しなければ切符が買えなかったし、案内板などという親切なものはなく、街を知らない人間は、駅構内でも右往左往する羽目になった。構内は薄暗く、汚く、ホームレスの人たちが放つ臭気が充満していたし、必ず、どこからともなく物乞いが現れた。ようやく電車に乗れば乗ったで、車内でジプシーの子供たちに囲まれ、財布を盗まれそうになったりした。

そういうすべてに怖気づいた私は、あるとき真理ちゃんに、多少お金はかかっても、タクシーに乗ろうと提案してみた。すると、真理ちゃん是这样言った。「私たち、東京ガールなのよ？東京の、あの複雑な地下鉄を日々乗りこなしているんだから、パリの、こんな地下鉄はへっちゃらよ。お茶の子さいさいだわ。恐るるに足りない！」

あれから三十年がたち、多くの国の地下鉄が、あのころよりずっと安全で快適になったし、私も、外国に行っても無闇に怯まずに済む程度には大人になった。が、海外で地下鉄に乗るとき、私はいまでもあの言葉と、真理ちゃんの声を出す。

（出典：江國香織「パリの地下鉄と真理ちゃんの声」『旅ドロップ』小学館文庫、2022年、32～34頁）

[問1] 筆者たちが初めてパリを訪れたとき、旅が「かなり悲惨」なものになったのはなぜか。本文の内容に基づき、100字以内で説明しなさい。

[問2] 下線部「パリの、こんな地下鉄はへっちゃらよ」という真理ちゃん言葉には、どのような思いや考えが込められているか。本文の内容に基づき、100字以内で説明しなさい。

[問3] 筆者の体験を通して、この文章はどのようなメッセージを伝えようとしていると考えられるか。また、それについてあなた自身の考えを、300字以内で述べなさい。

II 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

社会心理学では、特権をより多くもっている集団を(a)優位集団、特権がない・少ない側を(b)劣位集団と呼ぶが、優位集団の一員が自分の特権に気づかないことには三つの背景・原因が挙げられる。

まず、優位に立っている側は、安定した居心地がいい環境が当たり前に保証されているため、「特権」と捉えられるべきものが「普通」だと解釈される。その結果、マジョリティ側は自分たちが特権をもつ優遇された集団に属していると捉えない。また、マイノリティは自分は何らかの集団に属しているという意識があるが（例：障害者である、など）、優位集団は自分が属する集団に対する帰属意識が薄いと考えられている（例：健常者である）。その結果、優位集団の人は自分のことを集団の一員としてではなく、個人であると考えて、ますます集団としての立場や地位がみえないものになるのである。

優位集団が自分の特権に気づかない二つ目の背景・原因として、優位集団はラベルや名前などで範囲を表示されていないことが挙げられる。これは構造言語学から借りた概念だが、言語の有標性は、二つの集団がある場合（マジョリティ対マイノリティ）、関係性がどのように非対称で階層的であるかを明らかにする。例えば、男性の俳優のことは俳優というが、女性の俳優を女優といたり、男性の医者には医者だが、女性の医者には女医といたりする場合、(A)優位集団のほうは規範的とされるために「無標」になり、下位集団は「異質」「異なる」と標識されるために「有標」になる。「無標」であることで、自分たちはある意味「標準」である、という無意識の刷り込みがここで起きる。

三つ目として、優位側は自分たちを不利な側と比較することは少ない、という点が挙げられる。例えば、ブレンダ・メイジャーらは、ある実験で男性が女性と同じ仕事を任されるが、そのとき男性は女性に比べてより高い収入を得ていることに気づかない傾向があることがわかった。その理由は、男性はほかの男性がどのくらい収入があるかに注意を払っていたが、より低い収入の女性には注意を向けなかったから、としている。これは、立場理論にも通じる特徴である。権力をもたない者（あるいは権力が制限されている者）は、権力をもつ側の考え方を熟知せずには生き残れないが、逆に、権力をもつ者（社会における強者）は自分の下にいる弱者について知ろうとしないうえ、自分の強者としての立場を可能にしている構造についても知ろうとしないのである。同様に、個人間で比較する場合、自分の優位性に安心感を抱いている人は、自分と類似しているあるいは自分よりも若干恵まれた人を比較対象とすることがほかの心理学研究でもわかっていることから、特権を多く有する側にとっては特権を有していない人は視野に入っていないことがうかがえる。

マジョリティ性を多くもつ人たちが、自分をもつ特権に無自覚であることがなぜ問題なのか。それは、「自分は特別に優遇されていない」という認識のもとで暮らしているため、「自分は「普通」で、特別ではない」「自分は差別などしていないし、何も悪くない」と思っているためである。それは言い換えれば、「自分には変わる必要がない」と思っているた

めである。差別に関してマジョリティ性を多くもつ優位集団の人たちが「自分は変わる必要がない」と考えているということは、裏を返せば、「マイノリティが変わればいい」と考えているのと同じことになる。変わる必要性を自覚していない場合や変わること自体に抵抗を示しているとなると、いくら研修などをして変化を促しても効果が期待できない。

(出典：出口真紀子「みえない「特権」を可視化するダイバーシティ教育とは？」岩淵功一編『多様性との対話 ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021年、167～169頁)

[問1] 下線 (a) (b) に関して、優位集団、劣位集団と同じ意味で使用されている言葉を、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

[問2] 下線部(A)で述べられている「無標」と「有標」について、それぞれの特徴と両者の関係を150字以内で説明しなさい。ただし、本文中の具体例(俳優／女優、医者／女医など)は用いず、一般的な定義として答えること。

[問3] 本文を踏まえ、優位集団が無自覚な特権を認識するためにどのような取組が必要か、あなたの考えを300字以内で述べてください。